学生・院生による教材開発実践コミュニティの展開
—小学校音楽科における主体的な学びをテーマに—

吉村治広（福井大学）

目的

本稿では、平成 29 年度から 3 年計画で進めている「小学校音楽科における児童の興味関心と ICT を活用した『深い学び』の開発」をテーマとする研究（科学研究費助成事業 基盤研究（C）17K04535）の方法論として、教育学部学生や教育学研究科院生との協働探究により、教員養成と教材開発を同時に進める一つの可能性を報告する。具体的には、学部・院の複数の授業において、異学年の学生・院生の存在を意識しながら横断的に教材開発を進める取組からみえた効果と課題を明らかにすることを目的とする。

結果

ICT 機器の導入・主体的な学びという条件が、否応なく音楽観や教育観を試し続けた結果、学部 2 回生のその狭さと頑なさが露呈した。そして、そのような認識は、動画や院生レポート、そしてアンケート結果に示された児童の生の声に触れることで決定的な変容が漸く促された。この経緯に、教材開発実践コミュニティ発展の可能性が示される一方で、児童と学生の価値観のずれ、何より学生の方がその範囲が狭かった事実は、音楽科教育や教員養成教育の構造的欠陥を疑わせるに十分なものであった。

方法

平成 30 年 4 月より、2 回生（8 名）、3 回生（6 名）、4 回生（1 名）、院生（6 名）の受講する複数の授業で、iOS アプリ GarageBand のサンプラー機能を使用した複数の授業案を横断的に検討していき、6 月下旬には F 市 F 小学校 3 年生と S 市 T 小学校 6 年生を対象とする実践検証を、それぞれの学校の教員に実施いただいた。研究の方法は、この過程における 2 回生の変容に注目し、その発言や記述内容を分析・考察する実践的方法をとる。

内容

1. 教材開発の流れ

(1) 学部授業と院授業の連携

2・3 回生対象の「初等・中等授業研究 I（4/13 ～ 6/8）」、2 回生対象の「音楽科教育法 I（6/11 ～ 7/24）」、院生対象の「音楽科教育演習（4/12 ～ 7/26）」を相互に関連付け、教材開発を共通の目標に授業を展開した。その一部を挙げれば、【院授業】文献検討（4/26）→【学部授業（院生参加）】学習展開の考案（4/27）→【院授業】模擬実践例の録画（5/10, 17）→【学部授業】学習展開案の評価（5/18）といった流れとなる。

(2) 授業実践校（F 小学校・T 小学校）との連携

実践校教員との打合せ内容を教材開発の課題として授業にフィードバックした。F 小学校からは、音を「よく聴く」ため、購入してでもイヤホンを準備したいとの思いとともに、指導上の危惧から「自由な音遊び」による導入と自由な言葉の録音は避けたいとの要望があった。T 小学校からは、楽しくやりがいを感じれば盛り上がるクラスであるため、難し過ぎない内容で、児童の意図を尊重した展開にしたい（「自由な音遊び」も歓迎）との要望があった。

なお、授業実践の際には、院生が参観・補助で参加し、目の当たりにした児童の様子をレポートにまとめた。記録動画だけでは伝わらない授業の実態を学部学生につなぎ、考える材料として大いに役立った。

2. 浮かび上がった課題

「自由な音遊び」から始まる模擬実践とキャラクターを音で表現するグループ活動を行った（6/11）時点で、2 回生の多くが、サンプラー実践の方法や内容に対する疑問をワークシートに記した。

(1) 子ども観に根ざしたもの

「子どもたちが理解できるこの機械の機能は限られる」「（画面上の）英語がわからない」「どこを触ったのかわからなくなる」「曲にするのは難しく感じました」「テーマがやりやすくおもしろい分、違う話に発展してしまうのではないか」「楽しいと感じない子への対応が難しそう」

(2) 音楽科の教育観に根ざしたもの

「このセッションを音楽の授業だと言われてやると、少しやりにくかった気がした」「何の授業だろうという疑問が生まれた」「意図がわからない」「これって音楽なの？と感じる子も少なくないのではないか」

3. 音楽観・教育観の拡大に向けて

(1)「音」と「音楽」に分類させる取り組み（6/18）

現状把握と認識拡大の働きかけとして展開したところ、ベートーベン交響曲第 5 番「運命」を 8 名中 7 名が「音楽」と判断（うち 5 名が音楽的価値を 10 点満点と評価）したが、「音楽づくり」の資料 CD『音楽をつくる』収録曲である「よびかけ」「ヴォイセス・カミング」が 7 名から「音楽」と認識されず、

音楽的価値（10 点満点）の平均点もそれぞれ 3.28 点と 1.57 点と低いものだった。また、「音楽」とは何かに直接言及しているタンドゥンの DVD を視聴しても、「音楽」とは「再現できるもの」「メロディーを感じることができたら」と記述するなど、学生独自の判断規準にぶれは生じなかった。

(2) サンプラー実践に関するアンケート回答 (7/2)

授業中にアプリを使用する時間の割合について、児童は「多い方がよい」か「バランスよく」を希望すると 7 名が想像しながらも、学生自身の思いとして、6 名が「歌うことや演奏することの時間が多い方がよい」と答えていた。

(3) F 小学校 3 年生対象の授業の記録動画と院生のレポートまとめを踏まえ授業の［課題ポイント］を考える (7/9)→互いに回答した［課題ポイント］の記述を見た上で［ポイント再考］調査に答える (7/23)

動画やレポートから児童が意欲的に取り組む様子を理解した学生は「予想と違っていたこと」として、「補助なしで iPad を操作でき」「ほとんどの児童が iPad を使いこなせていた」だけでなく、「音の変化に細かいところまで気づいて」「音に対する児童それぞれのこだわりや関心を強く感じ」ており、「議論が思っていた以上に盛り上が」り「意見の衝突も」みられるなど「様々な機能に夢中で取り組み、児童たちで活動ができていた」ことを挙げ、驚いた様子だった。それは、「意見が衝突するほど意欲的に取り組み、iPad を使いこなし、細かな表現もできるなど、実際の児童の反応は予想を大きく超えていた」かとの追加の問いに、7 名が「どちらかといえばそうだ」「全くそのとおりだ」と答え、「あれだけ意欲的に楽しそうにやってくれるとは思わなかった」「小学生ならではの発想がある」などの記述の他、「何から手をつけていいかわからず意見が衝突するような取組ができなかった」自分たちとの違いへの言及があったことからも確認できた。

「3 年生にデジタルな音の変化を聴き取らせたり工夫させたりする展開」の妥当性については 7 名が認めていた。残る 1 名の「音の変化が分かっても言語的に表現できなかった場面」に問題を感じ「妥当とは言い切ることができない」とした A さんも、音を認識する活動そのものについては「小学校の段階から『音楽』という認識の幅を広げられる点においてよかった」と捉えていた。

「3 年生には最初に説明をすることが必要？」との問いには、「3 年生は低学年」「大学生である私たちが使ったときでさえ」などと明らかに自分たちより能力的に劣ることを理由に挙げる回答が散見された。また、「すぐに活動に入ると収拾がつかなくなってしまう」「スムーズに授業を進めていく上では」といった、教師目線の理由も挙げられていた。

(4) F 小学校･T 小学校児童アンケート結果の確認 (7/23)

スクリーンに投影された集計結果を見て、自分自身の回答や予想した児童と実際の児童の回答のずれの大きさを知った学生たちは、口々に「えー」という驚きの声を上げ、顔を見合わせながら苦笑いしていた。グラフ化されたデータは、学生たちの想像を軽々と超え、サンプラー実践は児童にとって、普段の授業と比べて圧倒的に「楽しい」上に、さほど「難しく」もないことを示していた。次々と映し出されるアンケート結果が、活動時に「何をしたらいいかわからない」のは学生の方であり、何を音楽と認識するかについても、子どもを下にみた学生の予想が的外れであることを示していた。「メロディーがなくては音楽ではない」との認識を問う結果に至っては、F 小学校 3 年生よりも学部 2 回生の方の音楽観がわかりやすく狭いことが示された上に、最後の問いでは、学生の方が教科教育におけるサンプラー実践の意味が見出せていないことも明らかとなった。

4. 個別の変容が示唆する取組発展の可能性

児童アンケート結果を示した後、新学習指導要領の目標や内容を短時間で概説し、音楽科教育におけるサンプラー実践の意味を捉え直した。学生個別の課題はそれぞれに残るものの、D さんは「子どもたちは私たちよりも『音楽』というものを柔和にとらえているのだなと感じた。（……）私も子どもたちを見習って、音楽に対する心を開きたいと考える。楽しい授業だったという回答が 9 割越えなのにもびっくりした。」と音楽に向き合う態度を見直そうと考えた。また、最も音楽観が狭く感じられた B さんも「アンケートと結果からほとんどの児童が iPad での音楽の授業が楽しいと回答しており、否定的だった私の意見を見直すべきであると感じた。そして、私は児童の気持ちをまだ理解できていないのだと思った。」と記した。最終的に、どの学生の認識の変容にも今後の成長への希望を見出せ、救いとなった。